

## 持続の一義性

### —ドゥルーズ『ベルクソニスム』における時間論—

清塚 明朗

#### 1. はじめに

哲学史におけるベルクソンの功績は時間を中心的な問題へと押し上げたことにある。だが同時にそのことは、時間それだけを単独で論じることを無意味なものへと変えてしまったのかもしれない。例えば、時間がすべての物事の在り様に深く関与しているのであれば、時間を論じることは存在を論じることへ導かれることになるし、反対に存在を論じるときには必然的に時間に言及することになる。この場合、存在論の意義は時間論との関係の中で見定められるのであり、時間論と存在論がいかなる関係になっているかを論じる必要がある。ベルクソンの時間論を好意的に取り上げて存在論を考察しようとするなら、なおさらである。

ドゥルーズは『ベルクソニスム』<sup>1</sup>においてベルクソンの時間論を存在論的に読解した。そのような読解の意義は、潜在性や多様体という概念<sup>2</sup>をはじめとした、この著作を通じて錬成されたいくつかの概念が用いられた『差異と反復』などの後の著作が、確かに示している。しかしながら、時間論がドゥルーズ哲学の中でどのような位置を占めるのかという問いは、本格的に研究が進められつつある重要な問いである<sup>3</sup>。とりわけ『差異と反復』においては、時間論が他の議論とどのような関係を結んでいるかを明らかにすることが、差異と反復を結び合わせているこの本全体のプログラムを明らかにするための一つの鍵であろう<sup>4</sup>。

本稿が『ベルクソニスム』における時間論を扱う意図は、このような事情のもとで、ドゥルーズの時間論をその始原的な姿で取り出すことにある。すなわち、存在論化された姿で後に使用されることになる概念から、その時間論的な側面を再び浮かび上がらせることにある。ドゥルーズが潜在性や多様体などの概念を用いて論じた「持続の一元論」における持続の時間性とはいかなるものなのだろうか。そこでは持続が存在論的に解釈されるにしても、持続の議論が時間論として展開されているのも事実であるから、持続の時間性そのものを考察することを通して、ドゥルーズの時間論そのものの意義を検討する必要があると思われるので

ある。

## 2. 存在論的に読解された時間論

まずは、ドゥルーズの意図がベルクソンの時間論を存在論的に解釈することになったことの確認から始めよう。以下、本節では二つの事柄を取り挙げて、その確認を行う。

### 同時性のパラドックス

『ベルクソニスム』第3章で指摘される、記憶 *mémoire* についての4つのパラドックスのうち、時間論という観点からしてもっとも興味深いパラドックスは、「同時性 *contemporanéité* のパラドックス」であろう<sup>5</sup>。それは次のように表現されている。

任意の現在が現在であると同時に過去でないのだとしたら、どのようにしてそれが過ぎ去るというのか (B, 54 強調原著者)。

このパラドックスは、確かに現在と過去についての逆説的な言明ではあるが、こういった意味で時間に関するパラドックスと言えるのだろうか。というのも、ドゥルーズがこのパラドックスを取り挙げる文脈上の目的は潜在性の概念を提示することにあり、一見したところでは時間論としての解決を目指していないかのように見えるからである。

ベルクソンの『物質と記憶』における記憶力理論からドゥルーズが取り出すのは、自らを反復する過去の諸水準が記憶において、すなわち潜在性という次元で共存するという考えである。そのような考えが示すのは以下のことである<sup>6</sup>。現在は意識に現前しているという意味での「心理学的な」ものとして、過去は（意識に現前していないものという規定に代えて）即自的に存在するという意味で「存在論的な」ものとして、現在と過去とが本性において異なるものとして区別される。存在論的な意味で本当に存在する *être* と言えるのは過去の方であり、現在とはそれらのうち現前している *être présent* ものでしかない。意識に現前するものはただ一つ現在だけであるが、記憶において過去はすべて潜在的に共存している。要するに、（ドゥルーズ自身は明示的に記述していないが）「同時性」のパラドックスは次のように解消されるだろう。現在は現前していると同時に、記憶の全

体において過去一般と共存する過去として存在しているのであって、現在が過ぎ去って過去になるためには現前しているという性質だけを失えばよい。このようにして、ドゥルーズが「同時性」のパラドックスの解消を図るのは時間論的ではなく、存在論的であるように思われる。

同時性のパラドックスが存在論的に解消されたとしても、そのことによって、時間論の観点から新たに問いが生じる。潜在的な共存がどうして現在が過ぎ去るための条件となるのか。共存を経過と関係づける必要はどこにあるのか。

### 持続の一元論

「一つの持続か、それとも複数の持続か」と題された、続く『ベルクソニズム』第4章でもまた、そしてよりはっきりと、時間が存在へと読み替えられていく。そこでは、ベルクソンが『持続と同時性』で語っている「一つの普遍的で物質的な時間という仮説」<sup>7</sup>が考察されている。この「持続の一元論」に関するドゥルーズの議論の着地点は明白である。すなわち、すべての差異の程度が潜在的に共存する多様体はただ一つの時間に存する、ということである。ドゥルーズは次のように述べる。

ベルクソンに従えば、ただ一つの時間という仮説のみが、潜在的な多様体の本性を説明する。[……] 存在ないしは時間は、ある多様体である。ただし正確には、それは「多」なのではなく、自らの多様体のタイプに従って一である (B, 87 強調原著者)。

ここでもやはりドゥルーズの志向は存在論に向かっている。はっきりと「存在」と「時間」を並べることで、ベルクソンが時間の言葉で語った事柄を存在論的に読み替えようとするドゥルーズの意図がはっきりと表れている。

以下本項では、このような意図のもとで語られる「持続の一元論」の概要を確認するために、「潜在的な多様体がただ一つの時間を含むだけでなく、潜在的な多様体としての持続がこのただ一つの同じ時間である」(B, 83) ことが、どのようにして論証されるのかを見ていくことにする。

ドゥルーズが取り上げるのは、ベルクソンが相対性理論によって語られる瞬間の同時性 *simultanéité*<sup>8</sup> に対して流れの同時性という観念を提示するための、知覚の素朴な場面である。ベルクソンは次のように述べる。

私たちが川岸に座っているとき、水の流れ、船の滑りや鳥の飛翔、私たちの深い生命の絶え間ないざわめき、それらは私たちにとって随意に三つの異なったものであったり、ただ一つのものであったりする。私たちは全体を内面化し、三つの流れを溶け合せて自分の過程に引き込んでいくただ一つの知覚に関わることもできるし、また最初の二つを外に残して、そして私たちの注意を内と外とに分けることもできる。さらによい場合には、一つでも複数でもあるという注意のもつ独自の特性のおかげで、注意が三つの流れを結びつけながらも分離させることにより、同時に二つのことをなすこともできる<sup>9</sup>。

ベルクソンが語っているのは、私たちの持続が関与する知覚のうちに捉えられた諸々の事物、それらの流れの同時性である。諸々の事物の流れの同時性は、それらの事物を含み込んでいる知覚が与っている私たちの持続のもとにあることによって確認される、ということが彼の論述の主旨である。

もちろん、この知覚で捉えられている諸々の事物の流れに注目して注意を分割することなく、この知覚を一つの全体として受け取る場合、私たちは自身の持続を参照している。ところが他方でいくつかの事物の流れに注目して注意を分割する場合であっても、それらの流れすべてが同じ持続に参照させられることによって、それらの流れが相互に独立性を保ったままにそれらの流れの同時性を語る事ができる。したがって、いずれにしても、この知覚において参照されている時間は知覚主体である私たちの持続である。

ドゥルーズはベルクソンが知覚の素朴な場面に定位した論述を、より一般化して説明する。彼による説明は二つに場合分けされている。すなわち、多様体が潜在的なままにとどまる場合と、多様体が顕在化される場合である。第一の場合の説明は一言で片づけられている。ドゥルーズによれば、潜在的なものとは、「本性を変化させることなしには分割されず、分割されることによって本性を変化させる」(B, 36)。したがって、分割される以前の多様体、つまり顕在的な要素(ベルクソンの論述における諸々の事物の流れ)へ展開される以前の潜在的な多様体(ベルクソンの論述における私たちの持続)においては、「ただ一つの時間しかないことは明らかである」(B, 82 強調引用者)。この説明が明白であると思えるのは、ベルクソンが論述するような知覚の場面に定位している限りであるように思われる。換言すると、ドゥルーズが目指す到達目標が「持続の一元論」であることを考えれば、潜在的な多様体としての持続が、知覚主体としての個々人の持続に限定されない時間、すなわち「普遍的で非人称的なただ一つの時間」(強

調引用者) であるという論証としては不十分であるように思われる<sup>10</sup>。この点に関しては次節で論じることにして、第二の場合に移ろう。

多様体が顕在化する場合に関するドゥルーズの説明は、さきのベルクソンの論述から導かれる説明とは大きく異なっている。多様体が潜在的なままにとどまる場合の議論は、複数の流れが同時であると言えるために必要な共通の参照項として、知覚における私たちの持続が要請されているというものであった。ところが、多様体が顕在化する場合にドゥルーズの持ち出す論法は、そのように経験から直接にその条件を導き出すというものではなく、いわば帰謬法のごときものである。すなわち、複数の時間があるとすると、実在的な時間以外の他の時間は生きられうる時間であるということになり、結局、生きられうる時間はただ一つしかない、というものである。

子細に見ていこう。この点に関するドゥルーズの説明には二つの契機がある。第一に、多様体が顕在化して複数の流れが出てくる場合、「諸部分(流れ)が生きられなければならない、あるいは少なくとも生きられうると措定されるし考えられるのでなければならない」(B, 82)。例えばアキレスの歩みと亀の歩み(さらに分割を進めたいなら、それぞれの一步一步)という二つの流れが分割によって顕在化されるという事態を考えてみよう。ドゥルーズ流の分割の原理に従えば、本性において異なるものが分割において生じてくるのは、潜在的なものを分割して顕在的なものが生じてくるときである。反対に単に顕在的なものを分割しても本性が異なるものが生じることはない<sup>11</sup>。ところでアキレスの歩みと亀の歩み、あるいはそれぞれの一步一步を、それぞれに交換しあうことができないものとして見るとき、私たちはそれらを本性において異なっているものとして見ている。したがって、アキレスの歩みや亀の歩みの流れを顕在化させる場合、それは潜在的な多様体からの顕在化でなければならない。例えばそれは、さきのベルクソンの論述にあったような知覚の場面において、私たちがそれらの流れを知覚できるということである。あるいは、アキレスが亀の歩みを、亀がアキレスの歩みを知覚できるということである。要するに、顕在化された流れには、体験されうると想定できるという意味も含めた体験可能性がなければならない。

第二に、二つの時間の存在を措定するためには、「まったく「記号的な symbolique」ファクター、すなわち生きられるものに対立する、生きられたものを排除するファクター」(B, 82)が必要である。つまり、アキレスの歩みと亀の歩みの流れがまったく別々の二つの時間に属するのだと考えるためには、一方の時間が他方の時間に還元されてはならない。そうだとすると、前段落で確認した

ような体験可能性があってはならない。そこで、アキレス（流れAの主体）が亀（流れB）を観察するときには、「Bがそのように生きられないと知りながらAがBについて作り上げるイメージ」（B, 82）を導入する必要がある。また、亀がアキレスを観察するときも同様である。一切の体験可能性を排するそのような「記号的な」ファクターによってのみ、二つの時間は別々の時間と言うことができる。

以上の二つの要素から導き出される結論が、「諸部分（流れ）が生きられうるあるいは生きられるのは、ただ一つの時間というパースペクティブにおいてだけである」（B, 82 強調原著者）ということである。すなわち、体験可能性をもつ複数の時間は存在しないのであって、諸々の顕在的な流れが体験可能性をもちながら共存するのは、ただ一つの時間においてである。

このようにしてドゥルーズは、「潜在的な全体の水準に劣らず、顕在的な諸部分の水準で、一つの、そしてただ一つの時間が存在する」（B, 82）といった結論づける。しかしながら、これまでのドゥルーズの議論は、もし生きられうる時間があるのだとしたらその時間はただ一つの時間でなければならない、ということ論証したにすぎないように見える。言い換えると、相互に交流する可能性がまったくなく、何者にとっても生きられうることはない絶対的に相対的な時間の多元論が成立する可能性が排除されていない。「持続の一元論」を標榜するためには、ただ一つの時間だけが存在するというのを証立する必要があるのではないだろうか。この点についても次節で論じることにしてしよう。

ともあれ、ドゥルーズは同様の仕方で、さらに相対性理論との関係から生きられうる時間がただ一つであることを説明する。ここでは、顕在的な流れではなく、「相互に一樣な移動状態にある二つの系」<sup>12</sup>が問題になる。そのような系を任意に二つ選んできても、いずれの系も特権的であるということはない。それゆえに、観察者は任意に交換可能である。ところで、相互に一樣な移動状態にある二つの系S、S'において、観察者ピエールが系Sに属し、観察者ポールが系S'に属するとして、一方の系から見た他方の系の時間とはどのような身分となるのかを考えてみよう。まずそれらは、もちろんSにおけるピエールの時間ではないし、S'におけるポールの時間でもない。ついで、観察者は任意に交換可能であるので、参照系を変えてしまえば、系Sから見た系S'か、あるいは系S'から見た系Sかによって変わってくる量的な違いも問題にはならない。そして最後に、他方の系の時間は、「ピエールがポールによって生きられたあるいは生きられうるように思い描かれた時間」（B, 84）ですらない。というのも、ピエールがポールの属する時間を生きられるものとみなすなら、「ピエールはもはやポールがもつヴィジヨ

ンとしての自分自身しか見ないであろう」<sup>13</sup>とベルクソンが述べるように、ピエールは自分自身をもはや生きられたものとみなさないことになる（もちろん、ピエールとポールを入れ替えても同様である）からである。結局、「他の時間はピエールによってもポールによっても生きられえない何か、ピエールがポールを想像するようなポールによっても生きられない何かである。それは生きられたものを排除する純粋な記号であり、他の系ではなくその系が参照とされることを単に示しているにすぎない純粋な記号だ」（B, 85）ということになる。したがって、生きられうる時間はただ一つしかないとドゥルーズは結論づける。

以上のことをまとめて、相対論に対するベルクソンの批判の要点は二つの多様体の混同にある、とドゥルーズは主張する。生きられうる時間は一つしかないのであって、「潜在的な多様体としての持続がこのただ一つの同じ時間である」。誰にとっても生きることができない多様体、すなわち一切が顕在的でしかない多様体はこの時間に含まれないのである。

ところで、時間論という観点からまたもや問いが生じる。潜在的な多様体としての持続がただ一つの同じ時間だとして、この持続の時間性とは何なのだろうか。時間は存在と言い換えられてしまっている。そして強調されているのは潜在的な多様体の方である。ならば、潜在的な多様体が時間である必要はどこにあるのか。

### 3. 持続の一元論と存在の一義性

前節の二つの項の末尾でそれぞれ提出した、時間論から見た二つの問いに取り掛かる前に、今節では持続の一元論の論証を確認する過程で残してきた二つの疑問に回答を与えておきたい。すなわち、第一には、「持続の一元論」という表現によって語られる「持続」は「普遍的で非人称的な時間」だと述べられるが、「非人称的」ということはどのように確保されるのか。第二には、生きられうる時間はただ一つしかないとしても、そのただ一つの時間しか存在しないことはどのように確保されるのか。これらの疑問に対する回答もまた、ドゥルーズがベルクソンの時間論を存在論的に、すなわち潜在的な多様体として解釈しようとしたことに見つけられよう。

#### 非人称的な自然

『ベルクソニスム』第5章では、スピノザの用語を使って、「持続の一元論」を規定し直している。すなわち、自然 Nature である。一方で、本性の差異がある

ものとして区別された持続と物質は、収縮と弛緩という差異の程度によってつなげられる。持続はもっとも収縮した物質であり、物質はもっとも弛緩した持続である。それと同時に他方で、ドゥルーズは持続と物質は「差異の本性＝自然」（B, 94）によってつなげられていると考える。「持続はいわば能産的自然のごときものであり、物質は所産的自然のごときものである」（B, 94）。ドゥルーズは、潜在的に本性の差異を自らのうちに含み、自ら分割（差異化 *différenciation*）していくものとして持続に、能産的自然を割り当てる。そして、持続が分割され顕在化していった結果として物質に、所産的自然を割り当てる。そうして、次のようにまとめられる。

すべての程度が一つの同じ自然のうちで共存するのであって、その自然は一方では本性の差異において、他方では程度の差異において自らを表現する。このようなものが一元論の契機である。すべての程度がただ一つの時間において共存するのであって、その時間はそれ自体で自然である（B, 95）。

このように、潜在的な多様体としての持続は自然として捉えかえされ、持続の分割は自然の自己差異化の運動とみなされる。

潜在性と顕在性という存在論的な区別に従って、持続を自然へと読み替えることが正当であれば、「非人称的」という言葉はこの自然の特性を指し示していると理解できる。非人称的な時間の持続とは、個々人の持続のことではない。完全に収縮しきっているわけではない個々人の持続も、完全に弛緩しきっているわけではない物質も、それぞれの収縮・弛緩の程度に応じた水準で、潜在的な全体としての自然の中に対応しているものにすぎない。また非人称的な時間とは、顕在化されたものの総体として語られる時間のことでもない。それぞれの収縮・弛緩の程度に応じた水準が顕在化されることになるのだが、顕在化された諸部分どうしは、もはや完全な共存を許さない。言い換えると、顕在化されたものをいくら組み合わせたとところで、すべての水準が潜在的に共存していたその全体を回復することはない<sup>14</sup>。なによりも、一切が顕在的な多様体はただ一つの時間にはなれない。したがって、収縮の特定の程度を表す潜在的な一水準ではなく、あるいはその水準に対応した顕在的なものの総体ではなく、すべての水準が共存する潜在的な全体としての自然をこそ「非人称的」と形容することができよう。

生きられうるという一義性



ただ一つ、生きられうる時間だけが存在すると言えるのはなぜかという第二の疑問に答えるために、補助線として、『差異と反復』の「存在の一義性」に関する議論を援用したい。本性の差異と程度の差異とが差異の本性によってつながられている潜在的な多様体という考えは、『差異と反復』にも見られる。ただし、この考えが同書の中で占める位置は、そこにおけるベルクソンの位置と合わせて、重要であることは間違いないが、曖昧な部分を残している。『差異と反復』におけるベルクソンの位置づけを論じることは本稿の主旨から外れるので詳述は避けたい。ここでは、同書の中でベルクソンには特権的な位置が与えられておらず、代わりにニーチェの永遠回帰こそが存在の一義性を実現していると語られる<sup>15</sup>のだが、「存在の一義性」という考えと、潜在的な多様体という概念がその中心にある「持続の一元論」という考えとには類似点を見いだすことができる<sup>16</sup>ことだけを指摘しておこう。『差異と反復』におけるベルクソンの評価は次の文章に凝縮されている。

程度の差異は単に差異のもっとも低い程度でしかなく、本性の差異は差異のもっとも高い本性である。本性の差異と程度の差異によって分離し、分化しているものを同じものにするのは、差異の程度ないし本性である。ただし、この同じとは、異なるものについて語られる同じのことである。そして、私たちが見たように、ベルクソンは極端な結論にまで進んでいた。すなわち、差異の本性と程度との同一性、その「同じ」がおそらく反復（存在論的反復）である…（DR, 309）。

異なるものを通して同じ意味が語られること、そしてその同じということが反復であること、これらのことを明らかにするのが存在の一義性という考えの一つの重要な意義である。それらがベルクソン哲学に対しても同じく語られている。すなわち、差異の本性と差異の程度とが同じであることによって、本性において異なるものをそのうちに含む巨大な一つの潜在的な多様体が構成される、ということである<sup>17</sup>。

話を『ベルクソニズム』に戻せば、この巨大な一つの潜在的な多様体こそ自然である。この多様体ないし自然が、本性において異なるものから程度において異なるものまで、多くの差異を含みつつも、それでも一つの全体であると言えるとしたら、それはそれらの差異を通じて同じ意味が語られるからである。そのことは、あえて言えば自然＝本性の一義性であろうが、時間が自然と言い換えられて

いる以上は、持続の一義性と言うこともできよう。というよりもむしろ、時間に関する議論を通じて持続の一元論が主張された以上は、時間に関しても自然＝本性と同じく一義性が述べられなければならない。

異なる諸々の流れを通じて語られる持続は一義的である。持続が一義的であることによって、諸々の流れをそのうちに含む巨大な一つの潜在的な多様体が構成される。再度、引用しよう。「諸部分（流れ）が生きられうるあるいは生きられるのは、ただ一つの時間というパースペクティブにおいてだけである」（強調引用者）。生きられうるもののみが、巨大な一つの潜在的な多様体の構成要素となりうる。ただし、ただ一つの時間というパースペクティブのもとにあるということは、生きられうるものがヒエラルキーをもって配列されているということの意味しない。なぜなら、ただ一つの時間という仮説が知覚の場面から始めて導かれたことを考えれば、私の持続こそがもっとも生きられうるものとなるはずであるが、持続の一元論が意味するのは私の持続を頂点とするヒエラルキーからである。パースペクティブという語が意味するのはむしろ、潜在的な多様体に含まれる本性において異なる諸部分さえも同じ意味によって貫かれていることである。すなわち、異なる諸部分が異なるままに、生きられうるものであるという同じ意味を持つ。反対に、一切の体験可能性を排した「記号的なファクター」によって措定される第二の時間は、持続と同じ意味を持っていない。あるいはむしろ、そのようにして措定された第二の時間は無意味だと言うべきであろう。というのも、「記号的なファクター」は、何者にとっても「生きられえない、あるいは生きられうると矛盾なしに考えられない」（B, 85, note 1 強調引用者）からである。要するに、生きられうるということは、持続と等価である。したがって、体験可能性をもつ諸部分の外には、時間は存在しないのである。

最後に、「非人称的」ということと「生きられうる」ということが対立する事柄ではない、ということをつけ加えておかなければならない。非人称的というのは、何者かのものではないということの意味しているにすぎない。非人称的な時間は、何者にとっても生きられない時間でもないし、誰にとっても生きられる時間でもない。そうではなく、非人称的な時間は、何者かにとっても生きられうるという意味での体験可能性のパースペクティブのもとでこそ成立する。換言すれば、巨大なただ一つの潜在的な多様体を構成するためには、「非人称的」ということ（自然）と「生きられうる」ということ（持続）とが両立しなければならない。

#### 4. 「一切は与えられていない」

いよいよ時間論から見た二つの問い、すなわち潜在的な共存がどうして現在が過ぎ去るための条件となるのかという問いと、潜在的な多様体が時間である必要はどこにあるのかという問い、に答える段となった。ところが、これまでの議論からして、すべての水準が潜在的に共存する多様体という存在論的な読解を前にして、時間が必要となる余地はあまり残されていないように見える。それでも、次のような問題に答えるためには時間が必要となるはずである。すなわち、すべての水準が潜在的に共存する多様体は、いかにして全体たりえるのか。それも、一にして全であるような一者としての全体とは違い、顕在化されたものが潜在的な全体に回帰することができないような全体を。そして、外的に課される統一による全体とは違い、異なるものが異なるままである全体を。

すべての水準が潜在的に共存する多様体は、ただ一つの時間において全体を構成する。ただし、とドゥルーズは次のように付け加える。

ベルクソンに従えば、「全体」という語はある意味を持つのだが、ただしそれは顕在的な何かを指し示さないという条件である。彼はつねに次のように喚起する。一切 [=全体] は与えられていない *tout n'est pas donné*。このことが意味するのは、全体という観念が意味を欠くということではなく、全体という観念が指し示すのは一つの潜在性であり、顕在的な諸部分が全体化されないままにあるということである (B, 95, note 2 強調原著者)。

すべての水準が共存する多様体が全体を構成するのは、ただ潜在性においてのみである。おのおのの水準に対応しているはずの顕在化された諸部分を繋ぎ合わせたところで、もともとの全体は形成されない。このことをドゥルーズは、「一切は与えられていない」というベルクソンの表現<sup>18</sup>に託している。潜在性の次元は、一切が与えられないことによって確保されるのである。しかしながら同時に、一切が与えられていないということが意味するのは次のことでもあることを注記しておかなければならない。すなわち、潜在的な多様体であっても、すっかり潜在的なままの全体が与えられることはない。というのも、持続は「絶えず自らを分割」(B, 36) し、諸部分を顕在化し続けるからである。自己差異化・顕在化の運動なしには、潜在的な多様体たりえない。

では、「一切は与えられていない」という表現における全体は何を意味しうる

のか。それは、ただ一つの時間というパースペクティブのもとで一切が与えられることを禁ずる当のものである。すなわち、時間である。ただ一つの時間というパースペクティブのもとでこそ、諸々の流れが外的に統一を課されることなく、異なるものが異なるままに自己差異化・顕在化の運動が行われる。それゆえに、多様体ではなく、時間こそが、一切が与えられてしまうことを禁じる力能、そのことによって潜在的な次元を成立させる力能をもつと言わなければならないのである。

以上をまとめて、さきに提出した問いに答えよう。すべての水準が共存する潜在的な多様体には、二つの契機を欠くことができない。一方では、一切が与えられないことによって、潜在性の次元は確保される（持続）。他方では、潜在的な多様体の自己差異化・顕在化の運動が行われるとともに、時が流れる（自然）。これら二つがそろって、巨大な一つの潜在的な多様体という考え（持続の一元論）は完成する。そのことを可能にするのが、持続としての時間なのである。時間のない多様体は画竜点睛を欠く。ただ一つの時間こそが潜在的な多様体を実現するのである<sup>19</sup>。

## 5. おわりに

潜在的な多様体と時間が関係づけられるのは、潜在的な多様体という考えがベルクソンの時間論の解釈を通じて生成されたからという偶発的な理由によるのではない。ことの本質からして、二つは関係づけて語られなければならない。ベルクソンがそう考えるように、「一切は与えられていない」ことが時間の本質なのであれば、潜在的な多様体は時間によってこそ成立する。時間の本質が潜在的な多様体であるというよりもむしろ、潜在的な多様体の本質こそが時間なのである。ドゥルーズの議論の意義が、ベルクソンの時間論を存在論的に解釈したことにあることは疑いが無いが、それを事柄として考察し直す場合、ドゥルーズ自身は必ずしも強調してはいないものの、持続が時間であるという根本的な事実が忘れられてはいけないのである。

---

<sup>1</sup> 次のドゥルーズの著作からの引用は慣例に従い、以下の略号を用いて、その略号とページ数を括弧で括って示すこととする。

B= *Le bergsonisme*     DR= *Différence et répétition*

<sup>2</sup> 質的多様体はベルクソンにおいて持続の謂いである。

<sup>3</sup> ドゥルーズ哲学を時間論として一貫して読み解く試みとして、例えば以下のものが挙げられ

---

る。Laporte (2005)、檜垣 (2010)。

<sup>4</sup> 例えば、朝倉は『差異と反復』の理論構成を時間論とシステム論の交錯によって読み解いている (朝倉 (2010))。

<sup>5</sup> cf. B, 57. 本稿では、残りの3つのパラドックス、「飛躍 *saut* のパラドックス」、「存在のパラドックス」、「心的反復のパラドックス」についてはそれとして取り上げない。ただし、4つのパラドックスは一体となって記憶の存在論的な特徴を指し示している。

<sup>6</sup> cf. B, 49-51.

<sup>7</sup> Bergson (1922, 44)

<sup>8</sup> 以下、同時性という語は *simultanéité* を意味する。

<sup>9</sup> (Bergson 1922, 50f)

<sup>10</sup> 檜垣は、流れの知覚という点に『持続と同時性』の限界を見ており、潜在的な持続の全体そのものへのアクセスに関する示唆を『シネマ』に求めている (檜垣 (2000, 238-40) を参照)。そのような発想は、「時間・全体・開けの関係を考えることは非常に難しい。私たちがそれを考えることを容易にしてくれるのが、まさしく映画なのだ」(Deleuze (1990, 80)) というドゥルーズの発言が促すところではある。しかしながら、結晶イメージなどの異なる概念を通じて考えることは、ドゥルーズが『持続と同時性』の解釈を通して提出した時間性の理解を取り逃すことになるのではないだろうか。

<sup>11</sup> cf. 「分割されるもののみならず、分割されることによって本性を変化させない」(B, 34)。

<sup>12</sup> Bergson (1922, 122)。したがって、問題となっているのは特殊相対論である。

<sup>13</sup> Bergson (1922, 74) (強調原著者)。

<sup>14</sup> cf. 「潜在的なものは、削除や限定によって顕在化をなすことはできず、自らを顕在化するために、肯定的な作用のうちで自身の顕在化の線を創造しなければならない。その理由は単純である。現実的なものはそれが実現するところの可能的なものの生き写しであり、類似しているのに対して、反対に顕在的なものはそれが受肉化させるところの潜在性に似ていない」(B, 100 強調原著者)。

<sup>15</sup> 選択的永遠回帰という、クロソウスキー＝ドゥルーズ流の永遠回帰解釈は非常に独特なもので、ニーチェ自身のテキストに即した正当化を必要とするだろう。しかしその作業は筆者の能力を大幅に超えたものであるので、本稿では、永遠回帰に託されたドゥルーズの意図だけを取り出すことにして、永遠回帰自体の解釈には踏み込まないことにする。

<sup>16</sup> モンテベロは持続の一元論を存在の一義性の中に位置づけ、ニーチェにおける一義性とバルクソンにおける一義性とを相補的な契機とみなしている。cf. Montebello (2006, 177-82)。

<sup>17</sup> ただし、『差異と反復』においてバルクソンは存在の一義性の系譜の中に位置づけられることはない。ドゥルーズがバルクソンの潜在的な多様体ではなく、ニーチェの永遠回帰を選んだ理由の一つとして考えられるのは、その強度概念にある。歯切れが悪いさきの引用は、そもそも、バルクソンの強度概念の不十分さを指摘した後に述べられたものであり、この引用の後で永遠回帰の強度概念が語られている。強いものだけが回帰するという選別の試練として永遠回帰の特徴を持っていない点で、潜在的な多様体は永遠回帰とは異なっている。

<sup>18</sup> 時間に対立するものの特徴として「一切が与えられている」という表現がバルクソンの著作の中に散見されるのに対して、「一切は与えられていない」という表現それ自体はほとんど登場しない。使用例を挙げれば、『創造的進化』において、「言い換えると、映画のフィルムの上でそうであるようには、一切が一挙に与えられていないというのは、どうしてなのか」

(Bergson 1907, 339) と述べられているくらいである。そうであっても、「ためらい」や「遅れ」がバルクソンの考える時間の特性であることと並んで、「一切は与えられていない」ことはまさしく時間の特性である。cf. Bergson (1934, 102)。

<sup>19</sup> 付言すれば、潜在的な多様体を実現するのが時間であることと、存在の一義性を実現するのが永遠回帰であることは、遠くないことを述べているように思われる。『差異と反復』における存在の一義性の系譜の中で、スピノザに欠けていたとされるのは、反復という時間的な要素

---

である。「一義性が純粋な肯定の対象になるためにスピノザ哲学にただ一つ欠けていたのは、  
[...] 反復としての一義性を永遠回帰において実現することである」(DR, 388 強調原著者)。  
ただし、永遠回帰が反復を通じて選別の試練として強いものだけを回帰させる力能をもつのに  
対して、一切が与えられることを禁ずるにすぎない時間にはそのような選別の基準はないだろ  
う。たとえ結果として時間が強いものだけを回帰させているとしても。

[参考文献]

- Bergson, Henri. 1907. *L'évolution créatrice*, P.U.F., coll. « Quadrige », 2008.  
— 1922. *Durée et simultanéité*, P.U.F., coll. « Quadrige », 2009.  
— 1934. *La pensée et le mouvant*, P.U.F., coll. « Quadrige », 2009.  
Deleuze, Gilles. 1966. *Le bergsonisme*, P.U.F., coll. « Quadrige », 2004.  
— 1968. *Différence et répétition*, P.U.F., coll. « Épiméthée », 2005.  
— 1990. *Pourparlers*, Les éditions de minuit.  
Laporte, Yann. 2005. *Gilles Deleuze, l'épreuve du temps*, L'Harmattan.  
Montebello, Pierre. 2006. "Deleuze et Spinoza : questions sur l'univocité de l'être," *kairos* 28: 155-82.  
朝倉友海. 2010. 「ドゥルーズ『差異と反復』における時間論とシステム論」, 『流砂』, 第3号,  
97-116.  
檜垣立哉. 2000. 『ベルクソンの哲学—生成する実在の肯定』, 勁草書房.  
— 2010. 『瞬間と永遠—ジル・ドゥルーズの時間論』, 岩波書店.